

## 修理工事こぼれ話⑭ 神殿正面中央の彫刻

第5回のコラムで、三の神殿妻飾（つまかざり）に取り付けられた獅子や牡丹といった具象的な彫刻を紹介しました。その回以降は、神殿の抽象的な彫刻を紹介してきましたが、阿蘇神社の神殿には他にも具象的な彫刻があります。今回はそれらの彫刻を紹介します。

### 1. 彫刻が取り付けられている箇所

紹介する彫刻は、一の神殿・二の神殿・三の神殿それぞれ、向拝（こうはい・ごはい）中央の虹梁（こうりょう）の上に取り付けられています。第11回のコラムでも紹介したように、向拝は阿蘇神社の神殿ですと、正面に位置し、彫刻を特に多用してにぎやかな造形となっている領域となっています。紹介する彫刻は、その中心ともいえる箇所のものであり、神殿それぞれで異なるもの取り付けられています。



一の神殿 正面



一の神殿 向拝中央虹梁上



二の神殿 正面



二の神殿 向拝中央虹梁上



三の神殿 正面



三の神殿 向拝中央虹梁上

## 2. 一の神殿



一の神殿 飛竜の彫刻

一の神殿の彫刻は、竜のように見えますが、これは飛竜（ひりゅう）という霊獣です。参考文献によると、竜と異なる図像的特徴は、尾が竜は蜥蜴（とかげ）型なのに対し飛竜は魚の尾びれ型であること、背中は竜が鱗なのに対し飛竜は羽毛であること、そして竜にはない翼が飛竜にはあることなどが挙げられています。

飛竜は水を司る霊獣とされ、日光東照宮には御水屋にも飛竜の彫刻が施されています。また、水を司るということから、防火の意味をこめて施されることもあるようです。そして、水を司るということから波とともに彫刻されることが多く、阿蘇神社一の神殿の飛竜も波とともに彫刻されています。

## 3. 二の神殿



二の神殿 桔梗の彫刻

二の神殿の彫刻は、桔梗です。

この彫刻は実際の桔梗の特徴を良く表現したものになっています。すなわち、花卉は5枚で星型の図柄のような形をしており、葉は葉脈が中央から枝分かれした形状をし、ギザギザした輪郭を持っています。蕾の輪郭も、角張っている感じが実物を想起させます。

桔梗は秋の七草のひとつに数えられ、根は鎮咳用の生薬として使用されています。家紋にも良く使われ、平安時代の陰陽師安倍晴明が使用した五芒紋のことも桔梗紋とよばれています。

#### 4. 三の神殿



三の神殿 葡萄の彫刻

三の神殿の彫刻は、葡萄（ぶどう）です。

枝がツル状で、5つに割れ輪郭がギザギザした葉など、実物の特徴を良く表現しています。そしてなんととっても小さい球状の果実が固まってついている形から葡萄であるということがわかります。

葡萄は古今東西様々なモチーフに使用されている植物であり、子孫繁栄などの意味があります。日本では『古事記』において、伊邪那岐命（いざなぎのみこと）が黄泉の国から逃げ帰るときに投げ捨てた鬘（かずら）が葡萄葛（えびづる）となったという記述がありますが、この葡萄葛は山ブドウという説があるようです。また、建築彫刻ですと葡萄と栗鼠（りす）という組み合わせで彫られることが多いです。

以上、一の神殿・二の神殿・三の神殿の向拝中央虹梁上の彫刻について見てきました。

なぜこれらのモチーフが選ばれたのかは明らかではありません。強引にでも考えてみると、一の神殿の飛竜は水を司る霊獣ですが、一の神殿にお祀りされている健甞龍命（たけいわたつのみこと）も水を司る神様であるため選ばれたのでしょうか。二の神殿の桔梗については、加藤清正が加藤氏の家紋である蛇の目紋の他に桔梗紋を使用していたり、熊本城にも桔梗紋の入った瓦があったり、熊本藩主細川氏の一門である細川内膳家も桔梗紋を使用していたりと、熊本藩は桔梗紋にゆかりがあるようです。これらと二の神殿の桔梗彫刻を結びつけるのは強引も強引ですが、こういった共通点があることについては興味深くはあります。三の神殿の葡萄は、第5回のコラムで紹介したように、獅子は聖域の守護獣であり菊は延命長寿の意味を持つため、これらと合わせて神社の末永い繁栄を願って葡萄がえらばれたのでしょうか。

強引にですが考察してみました。こういう意図が本当にあったかどうかはわかりませんが、こういった理由であれ、神様を祀る神殿の価値をさらに高めるために付けられた彫刻であることには間違いありません。

（石田 陽是）